

【桜井茶白山古墳】（奈良県桜井市外山）、鳥見山麓にある全長二〇七[㊦]、円形部一一〇[㊦]の柄鏡形前方後円墳。一九四九・五〇年の後円部における調査では、長大な竪穴式石室、その上に土盛りした方形壇、方形壇の縁に並ぶ二重口縁壺形埴輪が出た。これと同類の壺が箸墓古墳の方墳上にもあった。

四面に朱塗りした石室には、長さ五・一九[㊦]のトガをくり抜いた木棺があった。石室内から、王権の象徴とされる碧玉製の玉杖、三角縁神獸鏡など二十面近い鏡片、各種石製品、鉄剣・銅鏃・鉄鏃など副葬品が出た。

平成二十一年の再調査では、方形壇（東西九・二[㊦]、南北一一・七[㊦]）の周囲で幅約一[㊦]の溝が見つかり、溝の四方で柱十本分の痕跡が確認された。石室周辺から、大量の鏡破片や炭が出土した。前調査では四世紀後半から五世紀初めの古墳とされたが、近年の調査によって三世紀末から四世紀初めの築造と断定された。

出土した鏡の破片から少なくとも十三種、八〇枚以上の銅鏡があったと判明した。福岡県平原墳丘墓の四〇枚を大幅に上回り、最多である。国内最大級の直径四十数[㊦]に達する内行花文鏡の破片も出た。類似の鏡が平原墳丘墓から五枚も出ている。

橿原考古学研究所は、「石室上に土の方形壇を築いて壇周辺に供物用の壺を並べ立て、ついで火を使った葬送儀礼を営んだ後に、直径三〇[㊦]、高さ二・六[㊦]の丸太一五〇本で玉垣風に囲って聖域化した」と見立てる。

